

初期写真をめぐる視覚文化論的研究

大阪芸術大学 芸術計画学科 教授 青山 勝

【研究目的とその背景】

私は2016年に、公的に出版された世界初の写真集とされるW・F・H・トルボット(1800-77)の『自然の鉛筆』(1844-46)の完全日本語版を編集・出版した。それ以降、私は研究の対象を拡張し、初期写真およびそれをめぐる諸言説について、主に視覚文化論的観点から調査・研究を継続的に行ってきた。それは一方で、歴史的研究として、初期写真研究の基盤づくりに貢献することをめざすものであるとともに、他方で、初期写真がもつ歴史的意義を「複製技術」という観点から測定しつつ、多様な理論的研究や現代の映像表現ともリンクさせてその現在的意義の所在を探ろうとするものでもある。

上記の目的を達成するため、今年度は、特に以下の2点を中心に調査・研究を進めた。

- (1) フランスにおける写真の発明者の1人ニセフォール・ニエプス(1765-1833)の言説の再検証すること(特に、その核心部分の日本語訳を作成すること)。
- (2) 初期写真研究の現代的意義の発掘のため、「複製技術」ならびに「現代の映像表現との接点」という観点を軸に、視覚文化論的な調査・研究を進めること。

【今年度の主な研究成果について】

(1) ニエプスの「写真」実験に関する記述の多くは、彼の兄などに当てた膨大な書簡等の中に散在するかたちで埋め込まれている。その内容については、記述が断片的である、問題になっている「写真」がほぼ現存していない、等の理由から、フランスにおいてもさまざまな誤解を生んできたが、化学者のJ=L・マリニエは、その製法の再現を含めて徹底的な検証作業を行い、多くの疑問点を実証的、文献的に解明した。これらの研究を参照しつつ、ニエプスの写真発明に関する記述の核心部分(書簡等からの抜粋)を精緻に再検討し、可能な限り適切な日本語に置き換えるという作業に挑んだ。その成果の一端はすでに、「1816年のニセフォール・ニエプスの手紙から — 翻訳とコメント —」としてまとめ、次年度の『芸術文化研究』(24, 2020年2月)に掲載される予定である。

他方、この翻訳の過程であらためて痛感されたのは、初期写真の問題を考えるうえで、その写真製法を具体的・実証的に解明することの重要性である。フランスにおける「写真術の誕生」を視覚文化論的な観点から考察するうえでも、ニエプスやダゲールによる写真術を単に概念的に「外側から」捉えるのみならず、再現実験等も踏まえてその内容を「内側から」理解することではじめて、それをめぐる言説についても、より巨視的な視座から理論的反省を深めることが可能になる。今年度は、そうした取組へ向かうための前提として、ニエプスによる写真製法についての記

述の再検証、再現実験のための材料、道具等の調達、協力者への依頼と聞き取り調査等の作業を進めた。なお、2020年3月には、「現存する世界最初の写真」とされるニエプスの《ル・グラの窓からの眺め》(1827)が保管・展示されているハリー・ランソン・センター(テキサス州オースティン)に研究出張を行う予定である。

(2) 初期写真研究の現代的意義の発掘

W・F・H・トルボットの『自然の鉛筆』の刊行以来、これまで無数の「写真集(Photobook)」が出版されてきた。この「写真集」が、近年、美術館で展示されるような「オリジナル・プリント」とも、新聞・雑誌等のマスメディアで使用される写真とも区別される「自律的な芸術形態」をもつものとしてますます注目を集めるようになってきている。

写真家のマーティン・パーとジュリー・バジジャーによる『写真集—1つの歴史』の出版(2004年から14年までに3巻)はそのような関心の大きな広がりを見せる一つの徴候にすぎない。21世紀に入り、ますますデジタル環境が広がりを見せる中、作り手である写真家にとっても、受け手である愛好家、コレクター、研究者等にとっても、紙ベースの写真集の意味や役割が大きく変貌しつつある、ということもそうした動向の背景にあることは間違いない。2014年には写真集を専門的に扱うフォトブック・ミュージアムがケルンで開館し、その活動の中から2019年末に『芸術と社会における写真集』という書物も生まれている。それは、まさにデジタル時代においてアナログの写真集が持つ「もの」としての魅力に迫ろうとするものだ。

このような大きな世界的潮流のうねりの中で、国内外の「歴史的な写真集」が改めて脚光を浴び、そうした過去の写真集が「再出版」される機会も急速に増加している。「再出版」の語は「再刊」よりさらに広い事象を包括するものとして用いている。

今年度は、そうした「再出版」にともなうさまざまな問題を考察するための手始めとして、山沢栄子『遠近』(1962)、東松照明『太陽の鉛筆』(1975)という2つの写真集を取り上げて、その再出版にあたっての編者らの考え方や姿勢を、アンリ・カルティエ＝ブレッソン『かすめ取られたイメージ』(1952)のファクシミリ版(2014)の事例とも比較しつつ検討を加えた。その成果は、「写真集の再出版をめぐる」として、科研「現代美術の保存と修復」(研究代表者・岡田温司 JP15H01871)の報告書(2020年)に掲載される予定である。